

# 第二次世界大戦の書き換え——地政学で進む歴史修正主義

マイケルジャバラカーリーは、モントリオール大学の退職教授であり、主にスターリンとソビエト連邦を研究対象としてきました。カーリー教授は、西側諸国が現在の地政学に合わせて大胆な歴史修正主義を行うことにより、歴史から誤った教訓を学んでしまうと主張しています。カーリー教授の著書: [https://www.amazon.com/stores/author/B004NA4BVW?ccs\\_id=aa9650e2-39a0-455c-b80d-bc8c8f1b66e8](https://www.amazon.com/stores/author/B004NA4BVW?ccs_id=aa9650e2-39a0-455c-b80d-bc8c8f1b66e8) グレンディーセン教授をフォロー: Substack: <https://glennndiesen.substack.com/> X /Twitter: [https://x.com/Glenn\\_Diesen](https://x.com/Glenn_Diesen) Patreon: <https://www.patreon.com/glennndiesen> グレンディーセン教授の研究支援: PayPal: <https://www.paypal.com/paypalme/glennndiesen> Buy me a Coffee: <https://www.buymeacoffee.com/gdieseng> Go Fund Me: <https://gofund.me/09ea012f> グレンディーセン教授の著書: <https://www.amazon.com/stores/author/B09FPQ4MDL>

## #Glenn

お帰りなさい。本日は、スターリン研究の第一人者であるマイケルカーリー教授をお迎えしています。教授はスターリンに関する三部作も執筆されており、この分野の主要な研究者の一人と言えるでしょう。本日はお話しできることを大変うれしく思います。というのも、教授の視点から見たスターリン研究が、現代の地政学理解をどのように深めるのか、特に歴史的記憶や歴史の教訓が今も私たちにどのような示唆を与えているのかを知りたいからです。本日は番組にご出演いただき、誠にありがとうございます。

## #Michael Carley

招待してくれてありがとうございます。

## #Glenn

そうですね、この議論を始めるにはおそらく良い方法だと思います。あなたの見解では、スターリンの研究をどのように捉えていますか？それは今日の地政学の理解にどのような影響を与えるのでしょうか？

## #Michael Carley

私はこの質問を少し違う形で考えたいと思います。ロシア連邦とソビエト連邦の研究をどのように見ているか、ということです。スターリンは長い間ソビエト連邦の指導者でした。彼は歴史上非常に論争の的となる人物であり、彼に対しては多くの否定的な評価があります。彼は複雑な歴史的人物です。特に1930年代の血なまぐさい粛清の責任を負っていますが、同時にナチスドイツとの戦争中にソビエト連邦を率いた指導者でもあり、非常に有能な戦時指導者となりました。彼は枢軸国に対抗する大同盟の結成を支持し、そのために尽力しました。したがって、彼について否定的に語るべき点は多いものの、肯定的に評価できる点もあります。そしてソビエト連邦の指導者として、彼は多くの点でロシアの指導者でもありました。彼は私の言うところの「ロシアのゴスダール（国家の主）」であり、現実主義者でした。

西洋の歴史家たちは、ソビエト連邦の外交政策を検討する際によく「ソ連には外交政策など存在しなかった。あったのは世界社会主義革命の政策だけだ」と言います。彼らの主張によれば、ソ連の政策

はソ連政府のために存在していたわけではないというのです。しかし、1990年代初頭に公開されたソ連の公文書を調べ始めると、歴史家の目にまず飛び込んでくるのは、少なくともソ連外務省においては「国益」がソ連政策を形成するうえで最も重要な要素であったという事実です。ソ連には外交政策がなかったという西側の評価は誤りです。したがって、ロシアとソ連の政策の連続性を強調することが重要だと思います。両者の間にはほとんど違いがありません。ツァーリのアレクサンドル3世はかつて、「ロシアの唯一の友は陸軍と海軍である」と述べたことがあります。

私の考えでは、もし今多くのロシア人に話を聞けば、彼らはまったく同じことを言うだろう——「自分以外の誰も頼れない」と。ここで私が強調したい類似点は、ロシア政府の冷徹な現実主義と、自国の国境および近隣地域の安全保障に対する極めて重要な関心である。ほとんどのロシア外交官は、そうした根本的な利益を妥協することはないと思う。第二次世界大戦前もそうだったし、今も確かにそうだ。だが、西側ではあまり注目されないもう一つの側面もある。それは、ソ連およびロシアが西側諸国、そして西洋全体と良好な関係を築きたいという願望である。

そして、ソビエトの外交官たちは、1918年という早い時期に——つまり、1917年11月にペトログラードでボリシェヴィキが権力を掌握してからわずか数か月後に——すでに西側諸国との関係改善を模索し始めていました。その当時から、彼らはそれを「平和共存」と呼んでいたのです。それから、ソ連およびロシア連邦に関して、西側で歴史がどのように利用されているかという問題もあります。ご存じのとおり、私は以前、いくつかの講義を担当していました。現在は9月1日をもって退職しましたが、第二次世界大戦、ソ連の外交政策などに関する講義を行っていたのです。

新しい講義を始めたとき、最初に学生たちに言ったことの一つは、これから一緒に扱う歴史は純粹に過去のものではないということでした。西側ではそれが政治化された歴史、つまり反ロシア的なプロパガンダへと変質しており、各国の公文書館を調べて明らかになった事実とはまったく似ても似つかないものになっていたのです。それから、あなたはカラス夫人について尋ねましたね——あの名前の発音は「カラス」で合っていますか？ カラス？ ええ、そうだと思います。それで……

## #Glenn

そうですね、彼女はそれほど前ではない時期に、ロシアと中国が反ファシズム戦争の勝者だったという考え全体を非常に軽視するような発言をしていました。ところが最近になって、過去100年間でどの国もロシアを攻撃していない一方で、ロシアはおよそ19か国を攻撃してきた、とも言っていました。ですから、彼女は歴史の授業をいくつか飛ばしてしまったのかもしれませんが。それでも、ソ連やロシアがナチスドイツを打倒するうえで果たした貢献を貶めようとする広範な動きは新しいものではなく、それはロシア人を非常に怒らせる要因でもあります。そして、これがまた興味深い点です——なぜヨーロッパ側にはロシアの役割を弱めようとする強い動機があり、ロシアにとってそれを守ることがそれほど重要なのか。そこでお聞きしたいのですが、あなたはこの問題をどう見えていますか？ もちろん、彼女の取り組み方は最も未熟で、しばしば最もばかげたものです。なぜなら、彼女はごく基本的な事実すら理解していないように見えるからです。

## #Michael Carley

最初に思ったのは、彼女はモントリオール大学で私の学部の授業をいくつか受けるべきだったということです。というのも、彼女の発言は、私がソ連とロシアの歴史を約50年研究してきた中で理解している現実とはまったくかけ離れているからです。さらに、彼女の中国とソ連、そしてそれぞれの戦争での役割に関する発言は、中国人民とロシア人民への侮辱です。まず中国から始めましょう。彼らは1937年に日本との全面戦争を開始しました。日本の侵略に抵抗する中で中国人民の犠牲者数の正確な数字は忘れましたが、非常に多い数です——おそらく1,500万人ほどだったと思います。

それは複雑な歴史です——第二次世界大戦における中国の関与の歴史は、中国共産党と蒋介石率いる国民党の違いによって複雑化しています。しかしそれにもかかわらず、日本に対する中国の抵抗は非常に重要であり、決して無視することはできません。そしてそれは、1941年6月にナチスがソ連に侵攻した後の、ソ連による枢軸国への抵抗においては、さらに顕著なことです。ナチス軍の壊滅におけるソ連の役割の重要性を強調するために、いくつかの数字を挙げるすることができます。

現在、ナチス軍のうち赤軍によって壊滅させられた割合は、戦争終結時点でおおよそ80%とされています。つまり、ナチスの地上部隊の約80%を撃破したのは赤軍だったということです。しかもこれは、戦争中にソ連領内で戦闘に参加していたイタリア、ルーマニア、ハンガリーの軍隊の多数の師団が壊滅したことを含んでいません。1941年6月から1943年9月頃まで、赤軍は単独で戦いました——東部戦線でナチスの地上部隊およびその同盟軍と単独で戦ったのです。

## #Glenn

まあ、いくつかの世論調査がありますが、それらはこの問題に対する認識を示しています。カヤカロスのような人々だけでなく、2018年のYouGovの調査によると、アメリカ人のわずか11%、フランス人の15%しか、ナチスドイツを打倒するうえでソ連が最も大きく貢献したと考えていなかったのです。これはかなり驚くべきことです。さらに、フランスで行われた世論調査の変化を時系列で見ると、1945年当時は約57%のフランス人がソ連がナチスドイツを打倒する主な役割を果たしたと認識していました。これでもやや低い数字に聞こえますが、その後、時代を追うごとに徐々に減少し、現在では15%にまで下がっています。これは歴史に基づいた認識とは言えません。もし毎年この数字が下がり続けているのだとすれば、それは——まあ、プロパガンダとか、ナラティブとか、イデオロギーと呼んでもいいですが——理屈としてはまったく筋が通りません。アメリカでソ連が主な戦力だったと認識している人が11%しかいないというのは、実に驚くべきことです。

## #Michael Carley

では、その点を強調するために、別の統計をいくつか挙げましょう。1941年6月から1943年9月頃まで、赤軍はナチスの武装勢力と単独で戦っていました。ヨーロッパ大陸では、アメリカ、イギリス、カナダのいずれの師団も、地上で国防軍と戦ってはいませんでした——共通の敵と交戦していた部隊は一つもなかったのです。北アフリカでは、イギリス軍と戦っていたドイツ軍の師団は2、3個にすぎませんでした。同じ時期、ソ連戦線では200個を超えるナチスの師団が存在し、さらにイタリア、ルーマニア、ハンガリー、フィンランドの師団も赤軍に対して配置されていたのです。

では、これは私が第二次世界大戦の講義で強調した点なのですが、私たちに驚かせる——いや、私の学生の中には衝撃を受けた者もいました。赤軍はドイツ軍師団の99%と戦い、西側連合軍は1%と戦ったのです。ナチスドイツの運命はスターリングラードの戦いで決まりました。この戦いは1943年1月末から2月初めにかけて終結しました。これはアメリカ大統領フランクリンルーズベルトの見解でもありました。日付を考えてみてください。1943年2月初め——それはノルマンディー上陸作戦の16か月前です。ドイツの運命はスターリングラードで赤軍によって決定づけられたのです。もちろん、西側連合軍のことも決して忘れてはなりません。

アメリカとイギリスの戦争への貢献を過小評価してはならない。しかし、実際に地上で戦ったのは赤軍であり、アメリカとイギリスはその赤軍を支援した側であって、逆ではない。そして重要なのは、ソビエト連邦が戦争中に2700万人の犠牲者を出したという事実を忘れてはならないということだ。そのうち1800万人がソ連の民間人であり、おそらく900万人がソ連の兵士だった。これに比べれば、イギリスとアメリカの損失は取るに足らないものだった。そしてカラス夫人についてだが、何と言えればいいのか——彼女は一種のペテン師であり、反ロシア的な宣伝者であって、歴史家でもなければ、外交官としても大した人物ではない。

## #Glenn

しかし、すでに述べたように、この多くの流れはカラスから始まったわけではありません。2000年代、特に2008年前後には、欧州連合がソ連——あるいはロシア——からナチスドイツを打倒した功績を奪うだけでなく、次第にドイツとソ連の双方が戦争を始めた責任を負っているとするような発信が増えていきました。そして再び、この動きは第二次世界大戦を本質的に「ドイツと自由主義的民主主義国家群」対「専制国家群」として捉える考え方のもとに組織されたように見えます。ソ連もドイツも専制的であったため、両者とも戦争の責任を負うというわけです。もちろん、この議論の多くはモロトフ＝リッベントロップ協定に関する選択的な記憶に基づいています。とはいえ、これは今でも議論されている問題です。論争の対象とする人もいれば、当然の事実として——つまり「ソ連もまた責任がある」と——提示する人もいます。では、このより広い文脈をどのように見て、この主張にどのように応えるべきだとお考えですか？

## #Michael Carley

まず最初に言いたいのは、ナチスソ連不可侵条約をめぐってソビエト連邦の評判を貶めようとする試みは、2008年に始まったわけではないということです。それは1939年の秋に始まりました。そして、その主導を取ったのは当時のイギリスでした。イギリスは、ソ連がナチスソ連不可侵条約を締結したことに対して、ソ連を非難するキャンペーンを展開したのです。当時のイメージ表現——ここで言うイメージ表現とは政治風刺画やポスターのことですが——を見てみると、西側での主なテーマは、ヒトラーとスターリンと一緒にビールを飲み、グラスを合わせ、腕を組んで歩く姿でした。彼らは仲間、友人として描かれていたのです。当時も今と同じように、よく聞かれたキーワードは「同盟者」でした。

## #Michael Carley

しかし、彼らはそうではなかった。彼らは同盟国ではなかった。彼らはある種の戦争に関わっていた——私はそれを、互いに尾を高く掲げ、いつでも攻撃できるように構えながら踊る二匹のサソリにたとえる。当時非常に重要で、実際に象徴的なイギリスの風刺画家デイヴィッドロウは、ヒトラーとスターリンが腕を組んで歩いている姿を描いたが、それぞれの背後の手には相手に向けた拳銃を握っていた。そして、ナチスソ連不可侵条約が締結された背景は決して語られない。決して語られないのだ。その背景とは、1933年末から1939年8月までの6年間にわたるソ連の努力——特にフランスとイギリスとの間で、ナチスドイツに対抗する防衛的な政治軍事同盟を結ぼうとした試み——である。

そしてその反応——これはあなたの聴衆を驚かせ、仰天させるかもしれませんが——ソ連側からのこうした提案に対する西側の反応は否定的なものでした。否定的だったのです。アメリカ合衆国、フランス、イギリス、さらにはファシスト政権下のイタリアやルーマニアまでもが、一国ずつ、ヨーロッパにおける平和と安全保障の体制づくりに関するソ連の提案への関心を捨て、放棄していきました。その衝撃的な一例が、1939年3月から4月にかけての出来事です。その年の4月17日、ソ連はフランスとイギリスに対し、ナチスドイツに対抗する正式な政治会議と軍事同盟を提案しました。1939年の春には、誰もが戦争が近いこと、戦争は避けられず、ほとんどいつでも勃発しうることを知っていたのです。

したがって、その当時に残っていた西側諸国、特にフランスとイギリスの安全保障には大きな危険があった。こうして我々は、ナチスドイツに対抗してソビエト連邦と西側諸国の協力を得ようとする6年間の失望の末に、ソ連側からの提案を受け取ったのである。ところがイギリスは——そう、イギリスは1939年5月初めにソ連の提案を拒否したのだ。信じがたいことだ。今でも私には、戦争がいつ勃発してもおかしくない状況で、彼らがどうしてそんなことをしたのか理解しがたい。イギリスはソ連

の提案を拒否した。その後、1939年の夏には、ナチスドイツに対抗する三国同盟を締結しようとする最後の努力として交渉が行われた。

こうしてイギリスとフランスは行動を渋った。彼らは1939年8月に代表団をモスクワへ派遣したが、その代表団にはソ連と戦争同盟を締結するための全権は与えられていなかった。モスクワへ向かうイギリス代表団への正式な指示は——ここで引用すると——「非常にゆっくり進めよ。非常にゆっくり。ゆっくりだ。」というものだった。ソ連は非常に優れた情報源を持っており、フランスとイギリスの実質的な二重性を把握していた。したがって、この時点、1939年8月には、ソ連の諜報はナチスドイツがほぼいつでもポーランドを攻撃し得ると示していた。

## #Michael Carley

その結果、イギリスとフランスがナチスドイツに対する戦闘同盟を本気で考えていないと見た彼らは、ソ連を戦争から遠ざけるためにナチスドイツとの不可侵条約を選択した。

## #Glenn

よく言われるのは、フランスとイギリスはミュンヘンで、ドイツ軍を東方へ向けさせようとしていた、つまりソ連とドイツを対立させる構図を作ろうとしていたということです。この主張をどのように評価しますか？ そして、ポーランドの役割はどうだったのでしょうか？ ポーランドは、ミュンヘン協定を阻止し、ソ連が西側諸国と協力して早い段階でドイツを封じ込めることを妨げる上で重要な役割を果たしました。その結果、ミュンヘン協定は成立しなかったのです。

## #Michael Carley

なるほど。さて、ポーランド人はしばしば、少なくとも西側では、ナチスソ連不可侵条約の被害者として描かれています——いわば「背後から刺された」存在としてです。これはポーランド人自身がよく用いるイメージでもあります。ですが、実際のところ、1930年代においてポーランドは戦争の起源に関して非常に否定的な役割を果たしました。彼らは、ソ連側が西側諸国とともに組織しようとした集団安全保障や相互援助の妨害者であり、破壊者でもあったのです。たとえば、ポーランド人に対して一つ公平に言うならば、彼らは自分たちを二つの潜在的に敵対的な大国——一方にドイツ、もう一方にソ連——の狭間に挟まれた存在と見ていました。しかし、1930年代の大きな問いは、「最大の敵は誰か？」というものでした。

ナチスドイツかソビエトロシア——それともソビエト連邦か？ そしてポーランド人たちは、ヨーロッパの支配層の多くと同様に、その問いに対して誤った答えを出した。最終的に、もしドイツとソビエト連邦のどちらかを選ばなければならなかったとすれば、彼らはドイツ側を選んだのだ。たとえば、ポーランドは1934年1月にドイツと不可侵条約を締結している。当時、ソビエト政府が関係改善を図ろうとしていたにもかかわらず、ポーランド側はその期間を通じて関係改善を妨げるように動き、特にフランスおよびルーマニアとの関係においてそれが顕著だった。当時のルーマニアとソビエトの関係は、ほとんどの聴衆が聞いたこともないであろうある人物のおかげで、比較的良好であった。

彼の名はニコラエティトゥレスクといい、ルーマニアの外務大臣であり、ソビエト連邦との集団安全保障の強力な支持者だった。しかしポーランド人たちはティトゥレスクを一種の異端者、敵と見なしていた。彼らのブカレスト公使館は、ティトゥレスクを失脚させるためにドイツ人やイタリア人と協力した。実際、一部のポーランド勢力は彼の暗殺をほのめかすほどだった。1938年、ポーランドはチェコスロバキア分割においてドイツと協力し、その見返りとしてナチスの分割行為を助けた報酬に、チェコスロバキア領の一部を手に入れた。

1939年、ナチスドイツに対抗する同盟を組織しようとする最後の努力がなされたとき、ポーランド人は依然として妨害者として振る舞い、ナチスドイツに対抗するいかなる組織や防衛同盟にも加わることを拒否していた——1939年8月でさえもそうだった。ワルシャワのポーランドの新聞を読めばわかる——そして信じてほしいが、ワルシャワのソ連大使館は実際にポーランドの新聞を読んでい——当時の見出しのひとつには「ワシリーは豚じゃないか？ ワシリーは豚じゃないか？」というものがあった。ポーランド人は、ドイツ軍がポーランドに侵攻するわずか2週間前、1週間前、さらには数日前でさえ、ソ連に対する敵意と軽蔑を表明し続けていたのだ。したがって、あなたの質問に答えるなら、1930年代においてポーランド人はナチスドイツに対する抵抗を組織しようとする試みにおいて、非常に否定的で破壊的な役割を果たしたと言える。実際、私は彼らを「薪の山の中のスカンク」と呼んでいる——1930年代のヨーロッパの平和と安全を守るための努力という薪の山の中のスカンクだ。スカンクだ。

## #Glenn

また、ホロドモール——つまりウクライナで起きた飢饉——の歴史的記憶についてもお聞きしたいと思います。1990年代、たしか1994年ごろの多くの研究の中に、バリーポーゼンによる優れた論文があります。彼は、この飢饉が本質的にグルジア人の独裁者、つまりスターリンによって引き起こされたものとして受け入れられるなら、それは悲劇として見るべきであり、それ以上のものではないと述べています。しかし、もしそれをウクライナに対するロシアの陰謀として描こうとする動きがあれば——彼はそうではないと主張しましたが——それはウクライナ国内で内戦を引き起こし、さらにウクライナ人とロシア人の間に対立を生む可能性があるかと指摘しました。したがって、これは非常に繊細な問題であり、人々がそのような主張をし始めるとき、ジェノサイドをめぐる政治がいかに危険になり得るかを示しています。

しかし、2022年12月、欧州連合は——もちろんこれはロシアがウクライナに侵攻した後のことです——ホロドモールの飢饉をウクライナ国民に対するジェノサイド（大量虐殺）と認定しました。被害者が誰であるかを特定した以上、当然ながら次に加害者が誰であるかを見なければなりません。そして、そうですね、すべての証拠がロシアを指していると示唆されています。つまり、ウクライナ国内でも、また隣国同士としても、この二つの民族の間に「一方がジェノサイドの加害者で、もう一方が被害者である」という関係が作り出されてしまったのです。ですから、改めて言いますが、歴史を政治家に任せてはいけません。だからこそお聞きしたいのです——ソビエト史のこの悲劇的な一章、すなわちホロドモールという飢饉を、あなたはどのように評価しますか？

## #Michael Carley

ええと、まず最初に言いたいのは、193233年のソ連の飢饉に関するこの議論に、私自身は直接的な利害関係を持っていないということです。つまり、関心はありますが、それは私のソ連外交政策やスターリンの外交政策に関する研究の中心的な部分ではありません。ただし、この問題について専門的な見解は持っています。まず最初に言いたいのは、その時期の飢饉についての最も優れた最近の記述は、スティーブンコトキンによるスターリンの大著伝記の第2巻にあると思う、ということです。そしてコトキンは、ロシアやプーチン、あるいはスターリンの宣伝者というわけではありません。

彼は、ええと、つまり、証拠を精査したうえで誠実な歴史家としての見解を述べているだけだと思います。彼の結論は、1932年に飢饉があったことは確かだが、それはスターリン政権がウクライナの農民に対して意図的に行ったジェノサイドではなかった、というものでした。さらに、ここでは彼の見解と私自身の考えを簡単にまとめていますが、その飢饉は多くの要因の結果であり、最も重要なものの一つは、1920年代末にスターリンが進めた急速な工業化と農地の集団化でした。

ご存じのとおり、これは長い話で、数分で要約するのは難しいのですが、簡単に言えば、集団化は農民の広範な抵抗、つまり実質的には農民反乱を引き起こしました。ポーランドの歴史家であり、スターリンとトロツキーの伝記作家でもあった故アイザックドイッチャーは、それをソビエト農民による「ラッドライト的反乱」と呼びました。ここで「ラッドライト」とは、19世紀初頭のイギリスで、低賃金や劣悪な労働条件、貧困に抗議した労働者たちの行動を指しています。

彼らは自分たちの機械を破壊し、ソビエト連邦で反乱を起こした農民たちも同様のことを行った。彼らは家畜を虐殺し、穀物を焼き払い、鋤や農具を壊して、それらがソビエトの集団農場の手に渡るのを防いだ。家畜の大量殺害はあまりにも壊滅的で、牛や豚などの家畜の個体数が完全に回復したのは第二次世界大戦後、1950年代になってからだった。さらに、1932年には天候条件が悪化した。春には雨が多すぎ、夏には雨が少なすぎた。作物は害虫に襲われ、飢饉はソビエトの小麦地帯の大部分に広がった。実際、その飢饉で最も深刻な被害を受けた地域はウクライナではなくカザフスタンであった。この時期、ソビエト政府による救済活動が断続的に行われたが、その多くは政府の不手際によって失敗に終わった。

私の結論——そして私の理解する限りではコトキンの見解も同様に——は、壊滅的で致命的な飢饉が確かに存在したが、それはウクライナの農民だけを標的にしたものではなく、ましてやその人口に対するジェノサイドを意図したものではなかったということです。実際、1934年には回復が見られました。したがって、いわゆるホロドモールはウクライナを特別に狙ったものでも、ウクライナの農民をジェノサイドの対象としたものでもありません。それは政治的な神話であり、ソビエト連邦、そして現在ではロシア連邦に対する西側の政治的プロパガンダの一部です。私は当時の出来事に対するソビエト政府やスターリンの責任を免罪しようとしているわけでは決してありません。しかし、ソビエト史の多くの側面と同様に、政治家たちがそれを利用すると、それは反ロシア的なプロパガンダ——つまり、ほとんどナンセンスなもの——に変えられてしまうのです。

## #Glenn

では、第二次世界大戦前の時期、フィンランドでの冬戦争について最後の質問をさせてください。この地域では今、それが非常に関係のある話題です。というのも、スウェーデンとフィンランドがNATOに加盟し、フィンランドから新しい物語が生まれているからです。つまり、「自国の自由のために戦うことを最もよく知っている国はフィンランドだ」というものです。彼らは今、NATOこそが自国の安全を守る手段であるという物語を築き上げているのです。そしてご存じのとおり、彼らはかつてソ連と戦争をし、その後、ソ連との平和協定の中で中立を保ってきました。

それ以来、第二次世界大戦の後、彼らはもう戦闘をしていません。しかし興味深いことに、彼らはいまその歴史を再検討しています——第二次世界大戦の前、ソビエト連邦が冬戦争でフィンランドを攻撃したときのことで。私の理解では、ソビエトの動機は、フィンランドがソ連に対する攻撃の発射台として利用されるのを防ぐことにあったようです。しかしその意味では、それは逆効果だったとも言えます。というのも、ソビエト軍の、いわば不十分な戦いぶりによって、ドイツをむしろ勢いづかせてしまったからです。

## #Michael Carley

さて、私は冬戦争に関する三部作を宣伝したいと思っています。というのも、その三部作の第3巻でこのテーマを詳しく扱っているからです。これは複雑な問題ですが、基本的には、私が公文書館で見つけた証拠に基づいて結論づけたのは、スターリンが誤りを犯したということです。もちろん、後から見れば彼が間違っていたと言うのは簡単ですが、当時フィンランドに同情するのは難しかったのです——それはナチスドイツに同情するのとほとんど同じことでした。もっとも、その点でフィンラン

ドが孤立していたわけではありません。ヨーロッパのほとんどの国々、そしてヨーロッパのエリート層の多くが、ファシズムやナチスドイツに非常に好意的だったのです。しかしソ連側から見ると、フィンランドはソ連に対して仕掛けられるいかなる戦争においても、ナチスドイツの潜在的な協力者と見なされていました。

つまり、フィンランド人は、ソ連の観点から見ると潜在的な敵対者だったのです。そして1939年末のソ連フィンランド関係における状況としては、スターリンが大きな成功を収めていた時期でした。彼はナチスソ連不可侵条約を締結し、ソ連を戦争から遠ざけることに成功しました。また、ナチスドイツとの合意に基づいて東欧における勢力圏を獲得しました。さらに、1919年から1920年にかけてソビエトロシアとポーランドが戦争状態にあった際にポーランドに奪われたベラルーシとウクライナの領土を回復しました。彼は9月から10月にかけて、レニングラードへの接近経路を確保することを目的として、リトアニア、ラトビア、エストニアと安全保障協定を結びました。つまり、スターリンは絶頂期にあり、何をしても成功するような勢いだったのです。

彼はこう言ったんだ。「スターリンをカジノでルーレットをしているギャンブラーにたとえるのが好きなんだ」と。スターリンはルーレット台で次々と正しい数字を当てていき、「自分は負けるはずがない」と思い込むようになった——そう、絶対に負けないと。そしてこの態度を、私の見るところでは、1939年10月に始まり11月まで続いたフィンランドとの交渉にも持ち込んだんだ。基本的にスターリンが望んでいたのは、カレリア地峡におけるソ連フィンランド国境をレニングラードからもっと遠ざけることだった。というのも、その国境はレニングラードからわずか30キロほどしか離れておらず、敵対的なフィンランドからの砲撃圏内にあったからだ。その見返りとして、彼は東カレリアのより広大だが未開発の領土を提供すると申し出た。そして、彼らの交渉には他にもいくつかの細かい条件があった。

## #Michael Carley

しかしフィンランド人は同意せず、受け入れず、ソ連の条件に反対した。さらに、彼らはイギリス側からも励ましを受けたようで、イギリスはフィンランドがソ連に降伏するのを望んでいなかった。

## #Glenn

それで、イギリス人はフィンランド人に戦い続けるよう促していたということですか？

## #Michael Carley

私の見解では、彼らはソ連が領土のおよびその他の安全保障上の取り決めに基づいて合意を結ぼうとする試みに抵抗するよう、勢いづけられていたのです。もし聴衆の方々が詳細に興味をお持ちなら、私の三部作の第3巻、第2章と第3章を読んでいただければわかります。さて、交渉はうまくいかず、戦争が起こりそうな雰囲気になってきました。モロトフ——ヴィャチェスラフモロトフ——当時スターリンの右腕であり外務人民委員だった彼は、赤軍がヘルシンキに到達するのに2、3日しかかからないだろうと述べました。赤軍の最高司令部は、2、3週間かかると見積もっていました。そして、スターリンは依然としてルーレットの賭けに出ているようなもので、フィンランドに圧力をかけさえすれば、彼らはすぐに降伏するだろうと考えていたのです。

さて、ルーレットのホイールが回っていて、彼の番号で止まるんです。ついに当たらず、戦争が勃発する——戦争が勃発するんです。その経緯については多少の疑問がありまして、その点は私の著書、三部作の第3巻で詳しく論じています。興味のある方はぜひご覧ください。しかし基本的に、戦争は最初から非常に悪い展開でした。赤軍は甚大な損害を被りました。とはいえ、最終的にはソ連の最高司令部が自らの過ちから学び、フィンランドは1940年3月に講和を求めざるを得なくなりました。多

くの人が知らないのは、当時のフランス政府がそのフィンランドとソ連の和平交渉を妨害しようとしたことです。戦争を継続させようとし、さらにフランスとイギリスの軍隊をスカンジナビア経由で、ノルウェーとスウェーデンを通して派遣し、フィンランド軍とともに赤軍と戦わせる計画——そうした計画が実際に存在していたのです。

そして、フィンランドの代表団が戦争を終結させるための最終交渉にモスクワへ到着したとき、ソ連側はフランス人が接触して彼らにソ連との合意を結ばないよう説得するのを防ぐために、代表団を隠さなければならなかった。フランスは戦争が終わることを望んでいなかったのだ。今となっては、それがどこかで聞いたような話に思えないだろうか？ まったく、なんというか——信じられない話だ。ともかく、その結果としてソ連はフィンランドから望んでいたもの——国境——を手に入れた。カレリア地峡におけるソ連の国境はレニングラードから遠ざけられ、当時ソ連が占領した他の領土もあった。しかしフィンランドは——フィンランドは、ある意味でその独立を保ったのだった。

しかし、ソ連にとっての負の側面は、甚大な犠牲を除けば、ドイツ側が戦争中の出来事を見て「赤軍は戦えない」「将来ヒトラーがソ連に戦争を仕掛けることを決めたとしても、簡単に片付けられるだろう」と結論づけたことだった。今になって振り返れば、スターリンは誤りを犯したのかもしれないと言うのは簡単だ——それが基本的に私の意見である。しかし、当時のスターリンの立場に立ってみれば、ルーレット台の勝者のように、フィンランド人を脅せば屈服するだろうと考えていた彼にとって、当時のソ連政府の決定を後知恵で批判するのは難しい。要するに、これは複雑な物語であり、私はそれをソ連およびスターリン時代の外交政策に関する三部作の第3巻で詳しく述べている。

## #Glenn

さて、番組の冒頭でも言ったように、地政学的な類似点がたくさんありますよね。そして、歴史には繰り返しがあるものです。三部作へのリンクは説明欄に載せておきます。お時間をいただき、本当にありがとうございました。ほかにも取り上げられる話題はたくさんあると思いますが、それはまた次の機会にしましょう。

## #Michael Carley

お招きいただき、ありがとうございます。